

生薬ニユース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

ゴミシとは・・・

ゴミシは、チョウセンゴミシ : *Schisandra chinensis* の果実で、マツサ科に属します。中国の東北地方および河北省、韓国、北朝鮮からの輸入に依存しています。

ゴミシは漢字で『五味子』と書き、皮と果肉に**甘み**と**酸味**、種子に**辛み**と**苦み**、全体に**塩味**（鹹味）の5つの味を含んでいるという意味です。『五味』については後でお話します。

基原植物の名前が『チョウセン』とつくので、朝鮮半島にだけ分布するものと思われがちですが、実は、日本でも中部以北（長野県など）に分布しています。

【性味】 酸・温

【薬効】 斂肺止咳・固表止汗・平喘

今月のピックアップ

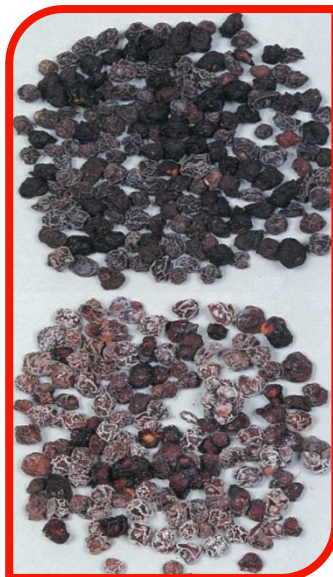
ごみし
五味子



熟すと赤く変化します。



ゴミシの成分・・・

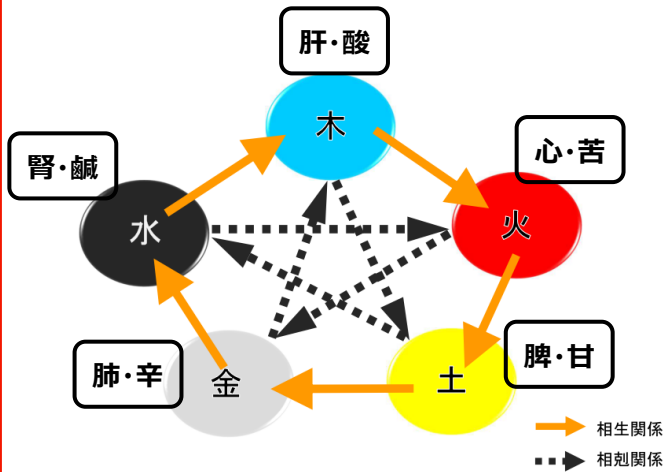


精油成分で**シトラール**の他に、鎮痛、ストレス潰瘍予防、胃液分泌抑制の作用を持つ**シサンドリン**、鎮痛、ストレス潰瘍予防、中枢抑制、鎮咳などの作用を持つ**ゴミシン A** などを含んでいます。これ以外に、主要な成分として**クエン酸**も含まれます。

左のゴミシの写真（乾燥させた果実）の上下を比較してみてください。下の**ゴミシ**の方が白い果実が多く見受けられます。この白い粉は**ゴミシ**に含まれる『**クエン酸**』が乾燥により析出したものです。下のほうがより多く**クエン酸**が析出されたように思えますが、実際は乾燥の方法などが改善し、現在では、白い析出物がほとんどない上の写真かもしくはもっと黒い**ゴミシ**が一般的です。

以前はこの**クエン酸**がたくさん析出した物が良品である証拠と説明されていたようです。この白い粉が**クエン酸**だと思えば、想像するだけで口の中が酸っぱくなりますね。

五味について・・・



前述しました『五味』について少しお話しします。

この『五味』は五臓（肝・心・脾・肺・腎；漢方薬の五臓とは解剖学的な臓器の考えとは必ずしも一致しません）と関連付けられており、左の図のように、酸味は肝に作用して『気』の巡りを調節し、苦味は心に作用して全身に血液をめぐらし、甘味は脾に作用して食物の消化吸収作用に寄与し、辛味は肺に作用して呼吸をつかさどり『気』をコントロールし、また、鹹味は腎に作用して体の水分代謝の調節をしたりします。この5つはお互いがそれぞれ相手を生じる関係（相生：そうしょう）と抑制する関係（相剋：そうこく）で影響しあっているのも面白い点ですね。

ゴミシの近縁種・・・

ゴミシと同じマツバサ科に属するサネカズラは、その樹皮を水に浸すとドロドロした粘液が出てくるので、これを整髪料として昔の人は使用していたそうです。ご存じの方もいるかもしれませんが、このサネカズラの別名として、ビナンカズラ（美男葛）と呼ばれることもあります。また、この粘液はひびやあかぎれに対して外用されていたようです。

ゴミシ（チョウセンゴミシ）はマツバサ属ですが、これの近縁で、サネカズラ属、シキミ属があり、以前はこれらの属は花の形態の類似性からモクレン科に分類されていましたが、今はこの3属が独立しマツバサ科にまとめられています。

シキミ属に分類されるトウシキミ（大茴香/八角：中華料理などで調味料によく使用されています）は以前、タミフル（抗インフルエンザ薬）の原料であるシキミ酸を含むため大量に買い占められ、その後生薬、食品としてのトウシキミの価格が暴騰してしまったという逸話があります。



ゴミシを含む方剤・・・

しょうせいりゅうとう

小青竜湯（水様鼻汁、鼻閉、くしゃみ、アレルギー性鼻炎など）

にんじんようえいとう

人参養栄湯（病後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振など）

せいしょえっきとう

清暑益気湯*（暑気あたり、暑さによる食欲不振・下痢・全身倦怠）

*清暑益気湯（医学六要）は近畿大学病院の処方では五味子は入っていません。